

言語とコミュニケーション



ノルウェー・オスロ市在住

木村 博子



国際会議場の国旗の前で

昨年はなぜかアジアに行く機会が多く、その帰りに日本にも何度か帰国できました。4月には日本翻訳者協会（JAT）の会議が沖縄の那覇で開催され、この「Hop-poken」誌の海外レポートでの仲間の鈴木いづみさんがアメリカから来られていて通訳セッションを持たれていたの、久しぶりにお会いできました。さらに、8月には翻訳者・通訳者の世界会議（FIT）が上海で開催され、ノルウェーから来た一人の日本人参加者としておおいに勉強させていただきました。国連や欧州連合からの代表も出席し、夏季オリンピックの開催直前ということも重なって、会場への出入りの警備は空港以上に厳重でした。けれども、会議場ではレベルの高いプレゼンテーションや興味深いセミナーが相次ぎ、また、展示会場では翻訳通訳関連の協会や組織、企業が大規模な展示をしていて、グローバル・ビジネスとしての業界の将来を感じさせられました。

民族文化遺産の保護と次世代

国連の「国際言語年」である2008年にあたり、上海の会議には、ユネスコの松浦晃一郎事務局長のメッセージが寄せられていました。言語の多様性は文化の多様性に繋がるものであり、グループや個人のアイデンティティーにも、平和共存にとっても、貧困・

飢餓の根絶、持続性ある環境のためにも必要不可欠な要素であると、多様性・多言語制度とその重要性を強調されていました。また、学校や教育機関や出版物、マスコミやサイバースペース等の公的な場で実際に使用されている言語は、現在日常表現に使用されている言語のごく少数でしかないということ、そして、世界中で現在話されている母国語のうちの半数以上があと二世代を経る前に消滅する可能性を述べられ、言語の絶滅やCITES（サイトス：「絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約」＝ワシントン条約）を思わせる危機感が感じられたメッセージでした。

ノルウェーでは、2008年は文化の「多様性の年」で、博物館や美術館、学校でも関連企画が組まれました。2009年度も企画助成金や奨学金が政府の特別予算に計上されています。全国的に学校で教えられている言語はブックモールとニューノシュクの2種類のノルウェー語で、第一外国語は英語が主で、第二外国語は最近では欧州語だけでなく、日本語も含めたそれ以外の言語も高校生たちが選択科目として学べる制度ができました。国民には先住民族・少数民族・移住者等がいるので、各種の広報書類や選挙用紙は多言語化してきています。

特に、先住民族であるサーミ民



上海での一景

族には民族を代表し権限を持つ「サーミ議会」（www.samediggi.no）があり、国王も首相も閣僚もそこを訪問されています。奨学金制度や文化事業や開発・交流の支援資金も設けられています。サーミ民族はスカンジナビア半島の北部にわたって暮らしているので、国境を越えた民族の共同体概念「サーミ・ランド」をもち、それを通じて北欧の共同映画制作など各種協力事業も行い、ロシアのサーミ支援もしています。国営放送では手話のニュース等と並行してサーミ語のニュースの時間があり、サーミ語の子供番組や出版物も徐々に拡大されています。民族博物館や各地の大学博物館にはサーミの展示が設けられていて、祝日も2月にあります。サーミ・カレッジもあり、北部ノルウェーの大学ではサーミ語や文化を専攻できます。若者たちを中心に17年前に創設された7月の民族音楽祭（www.riddu.no）には世界各地から先住民族の民族音楽奏者が集まります。日本からも来てもらえないものかと願っている私です。